

特別寄稿

『大乘莊嚴經論』「真實品」にみる勝義について

長尾 重輝

はじめに

瑜伽行唯識学派によって説かれた唯識の思想は八識説(眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・マナ識・アーラヤ識)とすべての存在するものを三種類に分類して観察する三性説(遍計所執性、依他起性、円成実性の三性)が中心である。本論では、それらが仏教が説く覺りや救いとどう結びつくのかを今一度整理することを目的とする。

今からおよそ二千五百年前、釈尊が自身の悩み、苦しみの原因とそれからの解放(苦・集・滅・道の四諦と纏められる)を達成したものが仏教として現在にまで伝わる過程で、釈尊入滅後、その教えは様々な立場から論師たちによって考察され、解釈が施されてきた。その仏教の変遷・展開過程についてはすでに諸先学により言及されているので、ここではあらためて取り上げないが、縁起と無我をめぐる考察がその中心であった。

瑜伽行唯識学派の論書である『大乘莊嚴經論』(Mahāvāna-sūtrāṅkara)<sup>1)</sup>においても精緻な考察が見られ、なかでも「真實品」はその名が示すとおり、真實(第一義、真實義、勝義)について説かれた章であるが、勝義(Para-mārtha)をはじめ無我(nairātmya)、輪廻(samsāra)、涅槃(nirvāna)など仏教全般になじみのある言葉から、唯心(citta-nātra)、転依(āśraya-parivāra, āśraya-parivṛiti)<sup>2)</sup>など唯識思想の極めて重要な概念が登場する。本論では「真實

品 第一偈に説かれる三性説を中心に、勝義を巡って試論を展開することにする。

### 三性説と縁起

有るのではなく、無いのでもなく、その様ではなく、別な様でもない。生ずるのでも滅するのでもなく、滅するのでもなく、

増すのでもなく、更にまた清浄にされるのでもないが、清浄にされるのでもある。それが勝義の相である。（「真実品」第一偈）

第一偈の注釈によると、「有るのではなく」は依他起性と遍計所執性の、「無いのでもなく」は円成実性の相を指している。また、「その様でなく」は依他起性と遍計所執性の二性が円成実性と同一ではないことを示し、「別の様でもない」はそれら三性が別々のものとしてあるのではないことをいう。「生ずるのでも滅するのでもなく」は法界（*dharmadhātu*）が造られたものではないこと（無為であること）を示し、「滅するのでもなく、増すのでもなく」は汚染と清浄の二面として存在するものが滅しても、また生じても法界はそのままに存続することをいう。「清浄にされるのでもない」は本来汚染がないこと（本性清浄）、「清浄にされないのでもない（清浄にされるのでもある）」は外来的な煩惱（客塵煩惱）が離れることを示している。

この偈は、法界の勝義（の相）が説かれたものであるが、『大乘莊嚴經論』においてはここ（「真実品」）ではじめて唯識思想の特徴である三性説についての言及がみられる。

三性説についても、やはり多くの先行研究があるが、ここでは『大乘莊嚴經論』における三性説の理解について、以下、「研究ノート」<sup>(3)</sup>より引用する。

三性説の用語がここで Comm。において初めて現れる。本論の偈の著者は、xi. 39 に parikalpataksana という以外にこの用語を全く用いてはいないが、三性の考え方に通じていることは明らかで、随って Comm。はこれ以後しきりに三性説を以て偈を解釈している。三性の構造が確立するのは、本偈の成立の後と思われる。

「研究ノート」にあるように、三性説として確立されるのは偈が説かれた後であろう。「大乘莊嚴經論」においては、三性説の他にも、偈が説かれた後に確立された思想が注釈で説かれるという例があり、偈の作者がそれらの思想に通じていたようである。

さて、その三性説の言及箇所を見ると、依他起性と遍計所執性の二性と円成実性との対比によって説かれていることが解る。

具体的には、依他起性と遍計所執性は妄想されたものであるから「有るのではなく」と説かれているが、これは遍計所執性が「妄想(無いものがあるかのように考えること)」されたものであり、依他起性はその「妄想」という汚染の縁起を起こす基であるから、有るのではないということである。「無いのではない」と説かれる円成実性は完全に成就したもの(円満・清浄)という意味であり、「妄想」を引き起こす依他起性という縁起を性質とするものとして「有るのではない」が、真実のあり方(勝義)としては「有る(無いのではない)」ということである。

このように、依他起性と遍計所執性の二性と円成実性とは同じ方ではないので「その様でなく」となっている。しかし、続いて「別の様でもない」として、三性がそれぞれ別のものとしてあるのではないことを示している。これは、依他起性が煩惱の汚染を取り除かれた目で見れば、それ(依他起性)はそのまま円成実性となるからである。

つまり、依他起性・遍計所執性と円成実性との相違点は、妄想と結びついているか、妄想を離れているかの違いな

のである。言い換えると、依他起性・遍計所執性は私たちが言語によって認識するという分別(煩惱)が生み出したものであり、一方、円成実性は、煩惱とともにある私たちによって生み出されることなく、本よりありのままに存在し、私たちが遠くかけ離れたものではないことを示している。

以上、「真実品」第一偈に見られる三性説の關係を見てきたが、それと仏教が説く覚りや救いとがどのように結び付けられるのであろうか。結論から言えば、真理、すなわち二取(自他・主客を区別する分別)を排除することで顕現する円成実性を獲得することが、仏教が説く覚りと考えられる。しかし、遍計所執性の世界を生き、本論では言及していないが、無意識の領域(意識の深層)で常に煩惱の根源となるアーラヤ識がはたらいっている私たちがそこ(円成実性の世界)に到達することは容易ではないであろう。真理(覚り)を求め、出家修行を前提とする上座仏教はもちろん、「大乘莊嚴經論」を著した瑜伽行唯識学派を含む大乘仏教の多くも修行を前提としている。しかし、そのような環境に身をおける人は限られている。戒律を守り、修行することなく真理に目覚める(覚る)人が皆無と言えないであろうが、果たして、厳しい修行にも耐えられない私たち凡夫にとつて、仏教は縁遠い存在なのであろうか。

ここで考えるべきは、先に述べた、造られたものではない(無為である)から「生ずるのでも滅するのでもなく」、汚染と清浄の二面として存在するものが滅しても、また生じても、ありのままに存続するから「滅するのでもなく、増すのでもなく」という特性を持つと説かれる法界についてである。

筆者が奉職する京都光華女子大学は真宗大谷派の關係校である。浄土真宗では聞法を強調する。聞法については大谷大学の小谷信千代教授より貴重な示唆を受けたので、それをここで紹介したい。<sup>(4)</sup>

唯識説では、教えを正しく「聞薰習」することによってこそ、わたしたちにお浄土という世界が現れ出てくる  
と言います。物事の本来あるべきあり方をしてしている世界、それが「浄土」だといいます。例えば、ここにいま見

えている一つの空間(世界)がありますが、これは自分の思い、「アーラヤ識」を通して見ている世界です。もし、その私の思い、分別を全部取り払って、この世界をあるがままに見ることができれば、そこに「浄土」が現れ出て来るといのように説明します。そのために、聞熏習をするのだと教えます。

(中略)

そのようにして自分の生き方を見ながら、自分がどれだけ大変なものを自分の中に、アーラヤ識の中にため込んでいるかということに気付くことによつてしか、釈尊が、本当に自分に言おうとされたことが聞き取れないのです。そうやって聞き取っていくこと、それが聞熏習ということですよ。

小谷氏によつて示された、聞熏習と聞法、物事の本来あるべきあり方をしてしている世界(円成実性)と浄土の関係を踏まえ、聞法(聞熏習)することによつて、私たちにとつても仏教が身近になり得ると筆者は考えている。つまり、一部の出家得度し、修行が可能な環境にある人のためだけではなく、一切の衆生が救われるという、釈尊によつて私たち一人ひとりに語りかけられた仏教となるのである。

瑜伽行唯識学派では、法界より流れ出る、様々なものに含まれる覚りへの資糧(真如の種子)があり、聞熏習はそれらを蓄えることで、それまで私たちを覆っていた二障(煩惱障・所知障)を除いて真理に目覚めてゆくと説かれる。つまり、聞熏習の増大により、転依(転換)が生じ、覚りの世界への一步を踏み出すのである。

その法界と円成実性がどのように結び付けられるかは未だ検討の余地はあるが、円成実性が汚染の結果である遍計所執性の対である清浄と説かれ、法界が本性清浄と説かれることから直ちに同一のものと断定することはできないであろうが、あらゆる存在は法界を離れては存在しえないことや、完全に円満なる性質(円成実性)と真理の頭れである法界という性質から、両者は極めて近いものであると考えられはしないであろうか。だとすれば、遍計所執性と

円成実性との関係については先に述べたとおりであるから、真理、あるいは真如の種子に私たちは意識することなく触れていることになるであろう。

言うまでもなく、瑜伽行唯識学派では自利利他の菩提心を発し、修行する菩薩を前提に説かれている。聞熏習も修行者を対象としているのである。堅固な菩提心を発し、言葉だけに捉われず、教えの本当に言おうとすることに耳を傾け、かつ深く思いを巡らす人が聞熏習を増大させることは間違いないであろう。しかし、アーラヤ識が私たちの無意識の領域ではたらくものである以上、私たち一人ひとりが聞熏習を増大させることによって、覚り(救い)へと近づく可能性が開けてくるのではないであろうか。

アーラヤ識が転依(識を転じて智慧を得る)することも、その原因となる聞熏習も、また三性それぞれの関係もすべて縁起によって成立しているものであり、縁起によってこそ迷い(遍計所執性)から覚り(円成実性)へ、という転換が可能となるのである。

## 結 論

筆者は、仏教とは何を説いているか、ごく手短かに言えば、やはり縁起を自覚することによって得られる救いではないかと考えている。釈尊が諸行無常と説いたように、常に変化し続ける世界にあつて、私たちも常に変化している。私自身が変わりたいかと思つていても、私自身の環境が変われば私自身の置かれる立場が変化し、自然に私自身も変化する。アーラヤ識も三性説も縁起の道理に従うからこそ迷いから覚り(救い)へとという変容が可能となる。

『大乘莊嚴經論』『真実品』の第一偈にみられる勝義は、具体的には法界を説き、世俗の私たちが希求する真実のあり方を示すものである。そこに至る過程については、この一偈のみを以って理解できるものではないが、相対的な世界の中で自他(主客)を比較して常に悩み、苦しみの中でもがく私たちにとって、真理の頭れである、完全に円満で

あるとされる円成実性が実は身近なものであると知れば、さらに、私たちもそこに到達可能であり、今まで見えていた迷いの世界(遍計所執性)が覚りの世界(円成実性)と見えてくるという劇的な変容(転依)が起こる可能性があることに気づけば、それが光となり、覚り(救い)の道となるであろう。

註

- (1) 「大乘莊嚴經論」.. 著者については諸説あるが、偈を無着(Aśaṅga)、もしくは弥勒(Maitreya)とし、長行を世親(Vasubandhu)とする説が一般的であろう。
- (2) 転依.. 迷いの依り所(依止・所依)を転じて悟りの依り所とすること。(岩波仏教辞典 一九九八)
- (3) 「大乘莊嚴經論」和訳と註解―長尾雅人研究ノート(1)―(長尾文庫 二〇〇七) 二二八頁。
- (4) 「真宗文化」第16号(真宗文化研究所 二〇〇七)